

## 東アフリカ農牧社会における経済活動の現代的展開

——タンザニア・スクマの移住と豪農化——

泉 直亮

### 要 旨

従来はタンザニア北部を居住域としてきた農牧民スクマの一部は、1970年代から社会的・経済的にもっとも重要な財産であるウシの放牧地を求めて、国内の各地へと移住を始めた。本論では、タンザニア南西部のルクワ平原に移住したスクマの経済活動の現代的な展開をあきらかにする。それは、家族労働を中心とする自給的な生産や、農業を商業化し非農業の商業をおこなう点で、従来の東アフリカ農民の生業や経済をめぐる議論で指摘されてきた農民像と共通しているが、以下の3点の新しい特質をもつ。第一に、スクマはウシを飼養することで、これまでは利用されなかった湿地などの土地を拓いて大規模な農業や牧畜をおこなう。第二に、近隣の民族や地域外から多くの労働者を雇用して剰余生産を拡大する。第三に、経済活動の母体は親族を中心とする大規模な世帯によって構成されるが、世帯内の親族の人数が多くなるほど多くの労働者を雇っている。

かつてスクマは、綿花栽培をとおして市場経済に参入しながらも、そこから得た利益を従来の財産である牛群の拡大に投資していた。しかし、現在ではウシを購入せずに、むしろ積極的に販売している。さらに、ウシの飼養や販売にくらべるとデメリットのある商業的な稲作や非農業の商売を始めている。経済活動をこのように大きく転換してきた要因は以下の2点である。第一に、ウシの伝染病の大流行によって牛群に大きな被害を受け、また、ウシの数を減らすように要求する政治的圧力のために、ウシに強く依存する生業に対する不安が大きくなった。第二に、経済の自由化によって市場流通網が整備されたためにウシや穀物の販路が拓けた。このようにスクマは市場経済を利用しながら、ウシ以外の財産の多様化をめざしている。すなわちスクマは、いまだにもっとも重要な財産であるウシを維持しつつ、従来の小農的だった生産を変革して、国家の周辺部において資本家的・豪農的な生産を展開している。

### キーワード

農民の経済、ウシ牧畜、大規模家族、農業の商業化、非農業活動

#### 1. はじめに

##### 1-1. 東アフリカ農民の生産様式

###### 1-1-1. 農牧複合

東アフリカの牧畜民といっても、畑作物にまったく依存せずに家畜の生産物だけで生活

している人びとはおらず、大部分の牧畜民はさまざまな程度で農耕をおこなってきた(太田 1989)。すなわち東アフリカの半乾燥地には、家畜飼養に高い価値をおきながら、農耕もさかんにおこなう農牧民がたくさんいる。

この人びとの農牧複合のありかたは、おもにふたつの視点から議論されてきた。第一は、技術的・経済的なシステムの視点である。農耕と牧畜が組み合わせに関しては、両者の有機的な結合が欠如しており、むしろ反比例の関係があること指摘されてきた。すなわち、農耕のために耕起手段や厩肥として家畜が利用されないし、生業の様式だけではなく社会的・文化的にも、農耕の要素が強くなれば牧畜の要素は弱くなり、逆に牧畜の要素が強くなれば農耕の要素が弱くなるという(福井 1969)。しかしながらこれとは逆に、農耕と牧畜が有機的に結合し、相互に補佐しあう農牧複合が存在しているという報告もある。たとえばシュナイダー(Schneider 1968)によると、タンザニアのトゥル社会では、多くのウシを飼養する世帯ほど厩肥の生産量も多くなり、それを畑に投入して多くの穀物作物を生産している。そして、穀物生産の剰余はウシを購入するために投資されており、ウシは貯蓄財としても重要である。トゥル社会ではまた、厩肥を利用するためにウシが貸借されるが、このことは同時に、人びとが社会関係を構築し維持する機能も担っている。

農牧複合が議論されてきた第二の分野は、自然環境との関わりである。アフリカにおける牧畜社会では一般に、降雨量が少なく農耕が不可能な乾燥地域において、家畜を飼養することによって生活を可能にしてきた。それに対して、東アフリカの農牧複合という生業は、農耕の適地であると同時に牧畜にも適しているサバンナの生態特性に支えられている(富川 2005)。このような自然環境は、より多くの家畜を飼養できるばあいが多く(神田 2011)。その理由は第一に、自然草地には大きなバイオマス量が存在するし、さらに作物の収穫後にその残渣を利用することによって、豊富な家畜飼料が得られること、第二には、農牧民は主食となる穀物の大半を自給しており、畜産物は副食として利用する程度であるため、飼養頭数が多くなるほど子牛に十分なミルクを与えることができることである。

### 1-1-2. 農民の経済とその変容

以上のように農牧複合は、技術的・経済的なシステムとして、また、自然環境との関わりにおいて議論されてきたが、農牧民の社会も現在、大きく変容しつつある。激動する現代的状況のもとで農牧という生産様式を把握するためには、理論的にどのような立場がありうるのかを、以下に述べる。

アフリカ、とくに東アフリカの農民経済の特徴のひとつとして、小農的な生産様式をとることが指摘されてきた。それは家族労働を基本として家族の生存と生計の維持に必要な生産をおこなうものであって、生産量を際限なく拡大するものではない。たとえばハイデン(Hyden 1980)は、おもにタンザニアを対象として、植民地期から独立期を経て1970年代の社会主義時代までの農村の変容を分析した。そして、親族や地縁などの親密な関係で結ばれている人びとのあいだには緊密な互酬的ネットワークが存在すること(「情の経済」)、そして人びとは小農的な生産様式をとっていることを指摘した。

また東アフリカの農耕民についての生態人類学的な研究においても、このような小農的な生産様式が指摘されており、その経済活動を背後からささえる精神世界についても議論された(e.g., 掛谷 1974)。他方で、東アフリカの牧畜社会については、家畜群を最大化しよ

うとする傾向が、市場経済が普及する以前から存在していたと指摘されている。ただし、このことは、旱魃や伝染病などによって多くの家畜が失われても、なお、自家消費の食糧を安定的に確保する必要があることと深く関連している (Dahl 1981)。すなわち、家族労働を中心として家族の生存や生計維持を目的としている点においては、牧畜民や農牧民の社会における生産様式も小農的である。

以上のような農民<sup>1</sup>の経済活動は、市場経済との関わりによって急速に変容している。とくに 1980 年代からアフリカ諸国は、世界銀行と国際通貨基金が主導する構造調整計画によって、さらにグローバルな市場経済の波にさらされてきた。これまでは自給的な要素が強い生業を営んでいた多くの農民が、市場経済に深く関与するようになり、現金に対する需要が増加したにもかかわらず、その稼得手手段に乏しい状況にある。一部の農民はみずから生産した農産物を市場で販売して収入を得ているが、商業的な大農場や都市部へ出稼ぎに行き、賃金労働に従事するものもいる。現代のアフリカ農民の生業は急速に多様化しつつ、空間的にも大きな広がりをもつようになった。

こうした現象に関する近年の研究は、農民の生活をこのような変動のなかに位置づけようとしている。たとえば、人びとが農業から非農業へと活動の場をひろげるとともに、労働や生産様式、生活様式が大きく変化し、「脱農化」が進んでいることがアフリカ各地で指摘されている (Bryceson 1996)。島田 (2007) は、アフリカ農民が臨機応変に生計手段や活動空間を変える「変わり身の速さ」をもつことを指摘している。また湖中 (2006) は、周辺的な地域社会では、経済のグローバル化にともなって生業経済と市場経済が併存する状況が一般化しているという視点に立ち、ケニアの牧畜社会において、その両者の経済がどのように複合しているのかを描き出している。

## 1-2. 本論の目的と調査地の概要

### 1-2-1. 目的

上記のような、市場経済の浸透にともなう農民の経済活動の変容は、タンザニアでもおこっている。しかしながら、比較的大規模な牧畜が可能となる農牧複合をおこなってきた人びとの経済活動を、詳細に記述した研究は存在しない。そこで本論では、アフリカ農民をめぐる以上のような議論を踏まえて、タンザニアの農村地域でおこっている変容を理解するために、タンザニア北部から国内の各地に移住している農牧民スクマの経済活動の現代的な展開を記述・分析する。

本論ではまず、スクマの民族形成から大規模な移住に至るまでの経緯、そして移住後の生活を文献資料にもとづいて概観する。つぎに、2010 年 12 月から 2011 年 8 月にかけて実施した現地調査にもとづく資料から、移住後のスクマの経済活動が市場を介して変容していることを詳細に記述する。そのときに焦点をあてるのは、世帯の労働力、農業生産、農業以外の商業活動という三つの項目である。また本論でスクマの経済活動が多様化していった要因を分析するさいには、市場流通網の確立と普及という要素だけではなく、人びとがさまざまな危機的状況を経験してきたことが、経済の多様化への大きな動機となっていたことに注目する。

---

<sup>1</sup> 本論で以下に「農民」と表記するさい、農耕民と牧畜民、農牧民のすべてを含む。

以上の記述と分析をとおして本論では、東アフリカの農民をめぐる従来の議論のなかに、スクマの経済活動の展開の特性を位置づける。具体的には第一に、市場経済を介して財産の多様化が起きていることを示し、資本家的な傾向と生存を維持しようとする傾向—対照的なふたつの指向性—のあいだの関連を検討する。第二に、以前は大規模な家族労働を中心としながらも小農的であったスクマの生産様式が、現在は、そのような家族を基礎としつつ、多くの雇用労働力を投入して生産を拡大する豪農的なものへと転換していることを示し、その意義を議論する。

## 1-2-2. 調査地の概要

本論で対象とするのは、タンザニア南西部のルクワ平原に住むスクマの経済活動である。ルクワ地溝帯の最低部にはルクワ湖があり、その湖岸にはルクワ平原が広がっている。調査地は、このルクワ平原に位置するルクワ州キペタ区キリヤマトゥンドゥ村である(図1)。ルクワ平原の南西側には、標高差が約500mの長大なエスカープメントが連なっている。

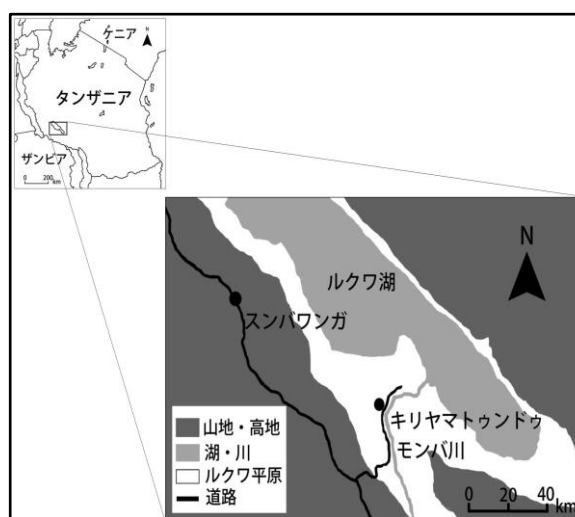


図1 調査地の位置

その上部に位置するルクワ州の州都であるスンバワンガからキリヤマトゥンドゥ村までの直線距離は約85kmであるが、ここに至るにはエスカープメントをくだる未舗装の道路しかなく、その道程は困難である。タンザニアの都市部から見ると、この地域は辺境であるといつてよい。人口は、キペタ区が16,966人、キリヤマトゥンドゥ村が3,285人である(2009年)。

キリヤマトゥンドゥ村は、標高約850m、年間降水量約800mmであり、雨季と乾季のはっきり分かれた半乾燥地に位置する。この地域の景観を特徴づけて

ているのは、イネ科草本が覆う草原と、モンバ河畔の川辺林、そしてアカシア林とヤシ林である。また、モンバ川の氾濫原やルクワ湖畔には季節湿地が広がる。また、例年の雨季は12月上旬から4月下旬、乾季は4月下旬から12月上旬である。

## 2. スクマ社会の概要と人びとの移住

### 2-1. 民族の形成過程

スクマは従来、タンザニア北部のビクトリア湖南岸にひろがるスクマランドをおもな生活域としてきた。「スクマ」とは、スクマランドの南隣に住むニャムウェジのことばで「北」を意味する。スクマ語とニャムウェジ語は、バンツ系系の「スクマ-ニャムウェジ・グループ」に属している。スクマとニャムウェジは言語だけでなく社会的習慣も類似しており、スクマの起源は、北方へ移動したニャムウェジの一部だろうと考えられている(Malcolm 1953)。

16世紀から19世紀にかけて、スクマランドでは人口の増加にともなう家族やクランのあいだで揉めごとが頻発するようになり、ウガンダ方面から移動してきたウシ牧畜民ヒマがそれを調停したと伝えられている (Malcolm 1953 ; Meertens et al. 1995)。その後、時代が進むにつれてスクマとヒマとのあいだで通婚がおこなわれるようになり、両者の文化が融合し、双方の要素をもった民族集団スクマが形成されたといわれている。そして19世紀後半には、マサイとの争いに敗れたナイロート系の牧畜民ダトーガがスクマランドに移住し、その一部がスクマと同化している (富川 2005)。このような経緯からスクマの生業や文化には牧畜的な要素が強く表れている。

スクマは農業をさかんにおこないながらも、ウシを中心とした多くの家畜を飼養してきた。東アフリカのほかの牧畜民や農牧民に共通して見られることであるが、スクマにとってもウシは、単に食料や貯蓄財として重要なだけでなく、文化的、社会的にも重要である。たとえば、ウシは婚資を中心とした社会的な交換財であり、ウシやそのミルクは多くの儀礼で利用される。スクマは多くのウシを所有することに高い価値を置いており、1950年代のスクマランドでは、1,000頭以上のウシを所有する家族が30から40ほどあったことが記録されている (Malcolm 1953)。

## 2-2. スクマランドの農村開発計画とスクマの移住

タンザニアは第一次世界大戦後にはイギリスの委任統治領となったが、その時期のスクマランドではさまざまな農村開発計画が実施され、人口と家畜数が大きく増加した。スクマランドの中核にあたるムワンザ県 (Old Mwanza District) では、1945年から1988年にかけて人口密度が51人/km<sup>2</sup>から114人/km<sup>2</sup>と2倍以上に増加した (Meertens et al. 1996)。また、スクマランド中央部の家畜の飼養頭数は、1944年から1960年代中ごろにかけて約2倍に増加したと推測されている (Charnley 1997)。その結果、耕作地と放牧地が不足するようになったことが、1970年代から始まるスクマの大規模な移住を引き起こす要因となった。

人口と家畜数の増加を引き起こした具体的な開発計画は、以下の3点である。その第一は、1930年代に犁による牛耕の技術が導入されたことである。それによって、手鋤では開墾できなかった土壌が利用できるようになった。またスクマは、従来はモロコシとトウジンビエ、サツマイモ、キャッサバを中心とした自給的な農耕をおこなってきたが、これに加えてトウモロコシやコメといった新しい自給作物が普及した (Malcolm 1953)。これらの結果、食糧の生産性は大きく向上した。

第二は、綿花栽培が導入され、1930年代から独立後の1970年代にかけて綿花がスクマランドのおもな換金作物となったことである。1970年代までは、この地域における綿花生産がタンザニア国内における総生産量の90%から95%を占めるほどに盛んだった (Hankins 1974)。とくに1950年代から1960年代にかけて、綿花の国際価格の上昇や政府による普及活動の影響でその生産量は急速に増加しており、1950年と1965年を比較すると約10倍に達している (Saylor 1970)。

しかし、綿花畑の大部分が家畜の放牧地に造成されたため、栽培面積の拡大にともなう放牧地が小さくなった。それにもかかわらず、スクマは家畜ではなく綿花を売ることによって現金を得ていたし、綿花の販売で得た利益でさらに家畜を購入した (Birley 1982)。その結

果、家畜の増加と放牧地の減少という大きな矛盾をかかえることになった。

第三の要因は、イギリス委任統治政府が、アフリカ睡眠病を引き起こす寄生性原虫であるトリパノソーマの宿主となるツェツェバエの撲滅事業を実施したことである(吉田 1997)。これによって人びとは、これまで利用できなかった土地を開拓し、以上に述べたように自給作物と換金作物を増産できることになった。また、アフリカ睡眠病は人獣共通の感染症であり、ツェツェバエの撲滅はウシを中心とする家畜の増加にもつながった。

人口と家畜数の増加のほかにも、スクマが移住するに至った要因を指摘することができる。それは、イギリスから独立したタンザニア政府が1967年から実施した「ウジャマー村政策」といわれる農村開発政策が、牧畜民や農牧民の生活形態にそぐわなかったことである(Havnevik 2010)。これは当時のニエレレ大統領みずからが構想した社会主義政策であり、以下の2点をおもな目標としていた。すなわち、(1)農民が従来とっていた散居形態を集村化すること、(2)集村化された村を経済単位として、生産活動の大部分を共同農場でおこなうことである。ところが、多くの家畜を飼養するには広い放牧地が必要なので、スクマはホームステッドどうしの間隔を通常はかなり離しており、さらに遠方に放牧キャンプを設置することもある。また、スクマは個人的に多くのウシを所有することに大きな価値をおく。そのため、多くのスクマがこのウジャマー村政策に反発し、これをのがれて移住する人びとが現れた。

以上のような経緯からスクマは、1970年代以降に家畜の放牧地や耕作地を求めて、タンザニア各地への大規模な移住を開始した。図2は、おもな移住先を示している。スクマは牛群の拡大に高い価値を置き、移住と定住をくり返してきた。したがっておもな移住先は、多くのウシを放牧できる広大な草原や湿地が未利用のまま残されていた場所に集中している。移住する際には、あらかじめ移住先の土地を視察してから、そこの村長の許可を得るのが一般的である。

スクマはタンザニアの人口の約13%を占めるといわれる最大の民族であり、現在は都市で農業とは関係のない経済活動を営むものも多くいる。本論が研究対象とするのは、ウシの放牧地を求めて移住したスクマである。

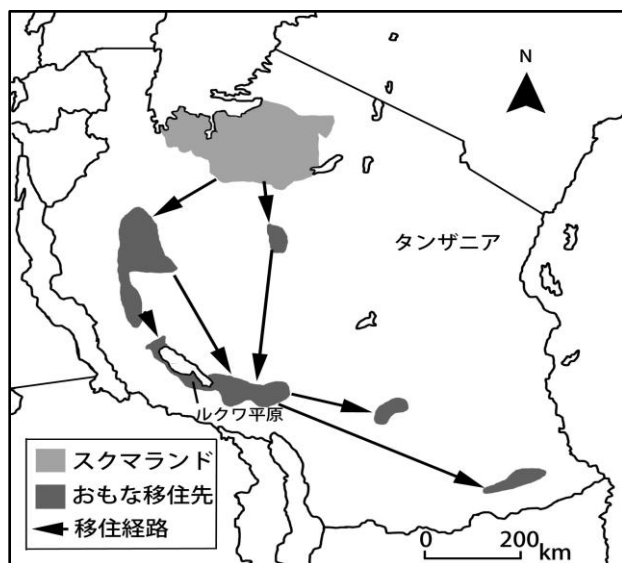


図2 スクマのおもな移住先

(Galaty 1988、神田 2011、加藤 2011 をもとに作成)

### 2-3. 移住後のスクマと先住民の関係

本論の調査地であるルクワ平原にスクマが移住し始めたのは、1980年ごろのことである。それ以前からこの地域には、バンツー系の農耕民ワンダが集落を作っていた。この地域には、多様な民族が移住してきたが、彼らの多くはほとんど家畜をもたない農耕民であり、先住するワンダと同じ生業を営みながら、次第にその社会に同化していった。しかしスクマは例外であった。彼らは先住民とは離れた場所に住み、独自の経済活動や文化を保持している。

ワンダは、スクマとは対照的に小規模な家族を生計の単位とし、小規模で自給的な農耕をおこなっている。ワンダの多くはモンバ川の周辺に集住している。それは、社会主義時代に実施された集住化政策の影響でもあるが、そもそもワンダはあまり家畜を飼養しないために放牧地が不要であるし、ウシやロバといった荷駄用の家畜をほとんどもっていないので、川辺から遠く離れると生活に必要な水を確保しにくくなる。また、ワンダにとってルクワ平原の広大な季節湿地は、ほとんど利用価値のない土地だった。その理由は、第一に、ワンダ社会では牛耕や水田稲作が普及していないため季節湿地を利用してこなかったし、第二には、家畜をあまり飼養しないために、この季節湿地を放牧地として利用することもなかったのである。

それに対して、この季節湿地はスクマにとっては有用な場所である。その第一の理由は、ウシを中心とする多くの家畜を飼養するためにその放牧地として重要なことである。第二に、スクマは牛耕による水田稲作をさかんにおこなうため、季節湿地は耕作地としても利用価値が高い。またスクマは、多くのウシやロバを荷駄用として飼養しているので、水辺から離れた場所でも暮らせる。そしてスクマは、ワンダが従来は利用してこなかった土地に住居を設けて季節湿地を利用してきたため、土地をめぐるワンダと競合することはなかった。

居住域と生業が大きく異なるため、スクマは移住してきた当初、ワンダをはじめとする先住の人びととは緊密な関係をもっていなかった。しかし近年、その関係が変化している。

その大きなきっかけは、1990年代から市場流通網が普及したことを受けて、スクマが、従来は自給的だった稲作を商業的に展開し始めたことである。その労働力として近隣に住む多くのワンダが雇われており、現在では、両者は経済的に強く依存している。また、スクマから牛耕と水田稲作の技術を学んだワンダのなかには、2000年ごろからみずからも水田稲作をおこなうものも現れた。神田(2011)によると、スクマと先住の農耕民との関係は、緊密な関係をもたない共住から相互に依存・協力を深める共生へと変化している。

しかしながら、この両者のあいだには耕作地と放牧地をめぐる対立関係があり、ときには暴行事件にいたることもあって、本格的に政府が介入した事例もある。これについては、4.で詳しく述べる。なお、以上に見たようなスクマと移住先の人びととの関係は、タンザニアの各地で起きている。たとえば、タンザニア中東部に位置するキロンベロ谷では、ルクワ平原のばあいとは詳細が異なるものの、対立・共住・共生という点では共通した関係が報告されている(加藤2011)。

## 2-4. スクマの社会と経済活動

### 2-4-1. 家族

スクマ社会では父系の出自をたどる。ひとつの家族はスクマ語でカヤといわれるホームステッドを共有しており、この家族が財産を管理し生計を営む単位となる。ホームステッドには、家長である男性、その複数の妻と子ども、そして成人して結婚した息子とその妻子と一緒に住むのが基本である。家長の兄弟の子ども(オイやメイ)などの親族が同居することもある。そうした人びとが同居する理由はさまざまである。たとえば、(1)身寄りをなくしたものが庇護される、(2)労働力の援助などを目的に親どうしの協議の結果として子どもが引き取られる、(3)家長から独立した妻帯者が、親族を頼って同居を申し出るばあいがある。

スクマにとっておもな財産は家畜と田畑である。家長は、こうした財産や自分の田畑で生産した作物に対して強い権限をもっており、原則として家長以外は、これらを処分することができない。既婚の男性は、やがて家長から家畜や田畑を分与されて独立するが、それができるのは、長年に渡って家長の財産を管理した親族の男性である。独立した男性はもとのホームステッドから離れ、自分のホームステッドを設けて新しい家長になる。独立する時期は、家長との交渉によって決まる。スクマは家畜に焼き印をほどこすが、それぞれの家長は独自の焼き印をもっている。独立した男性は、それまでの家長の焼き印の一部を変更して独自のものを創出する。

男性は家長の家畜の一部を一時的に預かり、自分の妻子とともに離れたところに住むことがある。これには、家畜群が病気などによって激減することに対するリスクを分散する機能があるが、男性が家長から独立するための準備期間となるばあいもある。そしてその男性は、家長から預かった家畜や自分で収穫した農作物をある程度、自分の裁量で処分できることもある。

一般的にスクマ社会では、女性は15歳、男性は20歳ぐらいから結婚適齢期にはいり、20代後半になれば第二妻を迎える男性も現れる。婚資は夫方親族から妻方親族に対して、離乳した12か月齢程度の子牛で支払われることが多く、観察された6つの事例では、その頭数には27頭から46頭までの幅があり、平均は36.8頭だった。ウシの所有権はすべて家



長にあるため、婚資はすべて家長によって支払われる。家長から独立していない男性が 3 人以上の妻と結婚することもあるが、そのばあいも同様である。

#### **2-4-2. 居住空間と経済活動**

スクマの居住空間は、カヤと呼ばれる定住的なホームステッドと、牧草や水場などの放牧条件の変化に応じて 1 か月から 4 か月程度で移動を繰り返すルワガと呼ばれる放牧キャンプにわかれる。ホームステッドは周辺に田畑があり、ここは居住と農耕の中心地である。またホームステッドには、100 頭ぐらいまでの比較的少数のウシやヤギ・ヒツジ、ロバが飼われており、搾乳や食肉、荷駄に利用される。また厩肥の利用を目的として、畑の一部に家畜囲いをつくることが多い。ここで暮らすのは女性と子ども、老人、そして雇用されている労働者が中心であり、若い男性は少ない。

他方で、多くの家畜は放牧キャンプで管理される。ふつう放牧キャンプはホームステッドから 2km~20km ぐらい離れており、乾燥が厳しくなるにしたがって、牧草や水場を求めて遠くに移動する傾向がある。ここでは、雇われ牧夫を含めて 10 歳から 35 歳ぐらいの若い男性が暮らす。ただし既婚男性は、自分の妻を訪ねることやホームステッドや農地を管理することを目的に、頻繁にホームステッドと放牧キャンプを行き来する。

ホームステッドに住む人びとの食生活はバラエティに富んでいる。自給している食物にはコメとトウモロコシ、牛乳、家畜や家禽の肉、畑でとれたカボチャ、トマト、サツマイモ、ラッカセイなどの野菜類などがある。また、近隣の農耕民ワンダの村で購入したナマズやスズメダイなどの魚や、ほかの野菜が食卓に並ぶこともある。他方で、放牧キャンプでの食生活は比較的単調であり、ホームステッドから運ばれてきた穀物とキャンプで搾乳された牛乳を基本としている。ルクワ湖で漁をしている人びとから購入した魚が食事に加わることもある。

### **3. 経済活動の多様化と商業的展開**

#### **3-1. 各世帯の構成と労働力**

表1 スクマの世帯構成

世帯主	親族						住み込み 労働者	合計
	男性			女性				
	既婚	未婚		既婚	未婚			
		10歳 以上	10歳 未満		10歳 以上	10歳 未満		
KK	9	9	27	15	8	14	11	93
CM	11	5	13	24	3	16	7	79
US	5	5	5	7	1	6	3	32
SM	1	3	8	4	3	6	6	31
MK	3	4	4	5	2	4	3	25
NL	2	3	1	4	5	6	2	23
SP	2	5	2	3	3	3	0	18
SK	2	2	2	5	0	6	1	18
MM	1	2	5	3	0	4	1	16
YS	1	2	1	3	1	1	0	9
UM	1	1	1	1	1	1	0	6
中央値	2	3	4	4	2	6	2	23

調査地であるキリヤマトゥンドゥ村の世帯の約80%は、先住の農耕民ワングの世帯であり、残りの約20%がスクマの世帯である。本論で調査対象としたのは、キリヤマトゥンドゥ村に住むスクマの11世帯である<sup>2</sup>。ここでいう世帯とは、ひとりの家長の家畜や田畑を共同で管理する集団を指しており、家長が世帯主である。表1は、その11世帯の構成を示している。親族は既婚者と未婚者にかけて、未婚者はさらに10歳以上と10歳未満に分類した。スクマの子どもは、男女ともにおよそ10歳に達すると農作業や放牧などに従事するため、本論では、10歳以上の子どもを労働力とみなしている。

またスクマの世帯では、親族ではない雇われの労働者が住み込みで働いていることもあるが、表1ではこれを「住み込み労働者」とした。住み込み労働者のほとんどは遠方から出稼ぎに来ており、表1に示したのは、そのうち2か月以上にわたって滞在したものである。彼らはすべてが男性で、おもに放牧キャンプで家畜の管理をするものと、ホームステッドで農作業やほかの雑用に従事するものがある。彼らの出身地や民族はさまざまであり、親族の男性と違って、家長から婚資を支払ってもらったり家畜を相続したりすることはない。また、調査対象とした11世帯の構成員で他世帯に雇われているものは、まったくいなかった。

<sup>2</sup> 調査地には大小さまざまな規模のスクマの世帯があり、その生産規模も多様である。ここでは、その規模の多様性を網羅できるように11世帯を選択した。後述するように、世帯の規模や生産の項目において、NL世帯が中央値かそれよりやや大きい値を示すが、これはこの地域の多くのスクマによる「NL世帯はとくに貧しくもなく裕福でもない『並』である」という見解と一致している。

世帯を構成する人数にはばらつきがあり、最大はKK世帯の93人、最小はUM世帯の6人であって、中央値はNL世帯の23人である。人数が少ないMM、YS、UMの世帯は、もとの家長から独立したばかりの核家族であり、ほかの世帯は拡大家族や、それをもとにほかの親族が同居する複合家族の構成をとっている。後者のばあいには、複数の妻をもつ男性を中心とする家族がいくつか集まって住み、大人数になる傾向にある。

以下では、各世帯の労働力がどのように確保されているのかを検討する。まず、各世帯における「親族における労働力の割合」と「労働力の雇用割合」との関係を見よう(図3)。前者は、ひとつの世帯を構成する親族全体のなかで10歳以上の人びとが占める割合であり、後者は、世帯全体の労働力のなかで住み込み労働者の占める割合である。スピアマンの順位相関係数の有意性を検定した結果、これらのあいだに強い負の相関関係が認められた。すなわちスキマは、親族のなかで十分な労働力が調達できないばあいには、それを補うために外部から労働者を雇い入れている。

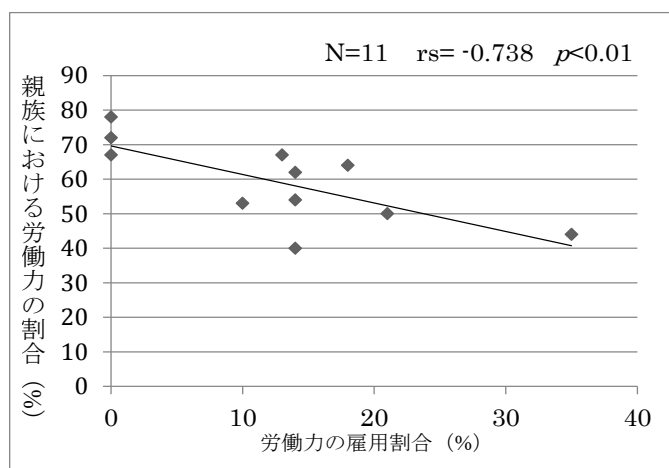


図3 親族における労働力の割合と労働力の雇用割合

つぎに、各世帯における親族の人数と住み込み労働者の人数との関係を検討したのが図4である。スピアマンの順位相関係数の有意性を検定した結果、両者のあいだにはきわめて強い正の相関関係が認められた。すなわち、親族の人数が多い世帯ほど、親族以外の多くの労働者を雇っていることになる。図3と図4からわかることをまとめると、以下のようなになる。親族か否かにかかわらず、構成員数が多い世帯では(あとで示すように家畜数も田畑の面積も大きく)、労働力とはならない子どもの割合が高く、多数の雇用労働者が住み込みで働いている。逆に構成員数の少ない世帯では、労働力を同居親族のなかで調達しており、住み込み労働者の人数が少ない。

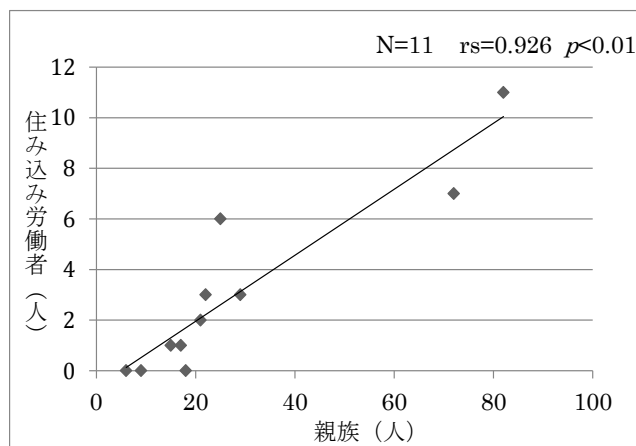


図4 親族と住み込み労働者の人数

1970年から1971年にかけてのスクマランドでは、外部から労働力を雇用することはほとんどなかったという(吉田1997)。キリヤマトゥンドゥ村のスクマたちからも同じ語りが聞かれた。そして彼らのあいだには、親族以外の労働者を雇用し、同居することに大きな抵抗がある。その大きな理由は、被雇用者は仕事を放棄して逃げるが多いし、その際に雇い主の金品を奪うことさえもあることである。実際に、2010年12月25日から2011年7月15日までのあいだにKK世帯に雇われて同居を始めた労働者14人のうち、8人は雇い主に告げることなく仕事を放棄して姿を消し、そのうち3人は金品を奪ったと思われる。

それに対して親族には、このような裏切りの心配がない。親族を裏切れば、その地域の人びとや近親者と関わって生活していくことが著しく困難になるし、家長の財産を管理している親族は、やがてその財産の一部が分与されて自分のものになることをわかっているからである。

このようなことが理由で、スクマは住み込み労働者、そのなかでもとくに新参のものをあまり信頼していない。しかし大家族のばあいには、多くの親族が被雇用者を監視していることによって不正を抑止しやすいため、住み込み労働者を雇うことの不安も軽減されるのだという。

ここまで、ひとつの世帯を構成する親族と住み込み労働者の人数の関係を検討してきたが、実際には両者の人数は、その世帯が飼養する家畜数や耕作する田畑の面積とふかく関連している。以下には、各世帯がどれだけの財産をもち、どれだけの生産をしているのかを示し、各世帯の生計戦略を考えていきたい。

### 3-2. 農作物の生産と商業化

彼らがおもに栽培している作物は、コメとトウモロコシ、モロコシ、ラッカセイ、サツマイモである。すべての作物が1年間に1度、収穫される。コメとサツマイモは単作、ほかは混作である。モロコシ畑には少量のゴマを、ラッカセイ畑には少量のトウモロコシを、そしてトウモロコシ畑には少量のトマトやカボチャを混作することがある。水田稲作は、おもに田植えによっておこなわれ、土地利用の観点からは、稲作はほかの畑作とは競合しない。

スクマはトラクターなどの農業機械は使わない。ウシを中心とする家畜は、以下の 4 つの方法で利用される。第一に、ほとんどすべてのスクマ世帯が牛耕をおこなっている。牛耕によって、手鋤よりも短時間で広い面積を耕作できるし、手鋤では耕すことが困難な粘土質の水田の土壌も耕作できる。第二には、家畜の糞尿を田畑に施肥する。これには、収穫後の田畑で家畜に作物残渣を食べさせると同時に糞尿を利用する方法と、ホームステッドの近くの畑の一面に家畜囲いをつくり、これを 1 年間に数回移動させる方法とがある。第三に、収穫した作物をロバやウシをもちいて運搬する。大規模な農耕をおこなう世帯では、家畜に牽引させる大型の荷車も利用する。第四に、水がはいり耕起がおわった田植え前の水田のなかでウシを歩かせ、代掻きをおこなう。一筆に数十頭から数百頭のウシが使われる。

スクマの人びとは、わずかに生産しているゴマのほとんどを販売するが、ほかの作物はすべて自家消費しており、剰余分を販売する。モロコシ、ラッカセイ、サツマイモについては、調査対象とした 11 世帯のうちで栽培していない世帯は、それぞれ 4、2、4 世帯である。またこれらを栽培している世帯も、自家消費量を大きく超えて生産・販売することはあまりない。それに対して主食であるコメとトウモロコシはすべての世帯が栽培しており、多くの世帯が自家消費量をうわまわる剰余を生産して、近年では積極的に市場で販売している。

調査地に広がる季節湿地やアカシア林は、稲作に適した生育環境を提供しており、移住してきたスクマが商業的な稲作を開始したことで、この地域は国内における稲作の一大生産地となった(神田 2011)。単位面積あたりの収量も比較的多く、本研究の調査ではスクマの粳米の収量は 4,504kg/ha であった<sup>3</sup>。また、神田(2011)によるとワングダの収量は 2,976kg/ha であり、この地域のコメの収量はいずれも、全国平均の 1,555kg/ha (Tanzania, MA & FS, SU 2002) を大きくうわまわっている。

表 2 と表 3 は、2010/2011 年度における各世帯のコメとトウモロコシの生産と消費の状況を示している。コメは粳米の状態、トウモロコシは天日によって自然乾燥させた脱穀後の子実の状態での重量と価格を示している。また、作付面積は実測によるもので、ほかの項目の数値は以下の方法によって算出した推測値である。

- ・ 自家消費量: 食事調査の結果、スクマは 1 日あたりコメを 0.49kg/人、トウモロコシを 0.4kg/人ずつ、それぞれ自家消費していた<sup>4</sup>。表 2 と 3 の自家消費量とは、これに世帯の人数(表 1 参照)と 365 (一年間の日数)を掛けた数値である。
- ・ 収量: 単位面積あたりの収量を調査した結果、コメは 0.45kg/m<sup>2</sup>、トウモロコシは 0.65kg/m<sup>2</sup>であった<sup>5</sup>。表 2 と 3 の収量とは、これに作付面積を掛けた数値である。
- ・ 剰余量: 上記の収量から自家消費量を差し引いた数値。
- ・ 剰余量の割合: 収量に占める剰余量の割合。

<sup>3</sup> 調査対象となるスクマの世帯の水田において実測した収量調査にもとづく。具体的には、20,309 m<sup>2</sup>の水田から 9,148kg の粳米が収穫された。

<sup>4</sup> 調査対象となるスクマの世帯において実測した、合計 20 日・60 回・のべ 593 人分の食事調査にもとづく。

<sup>5</sup> 調査対象となるスクマの世帯の畑において実測した収量調査にもとづく。具体的には、16,070 m<sup>2</sup>から 10,445kg のトウモロコシが収穫された。コメについては、注 2 参照。

収入：スクマが市場で販売している 1kg あたりの価格は、コメが約 450 タンザニア・シリング（以下、TZS）、トウモロコシが約 292TZS であった。表 2 と 3 の収入とは、すべての剰余量をこの価格で販売したときに得られる数値である。

表 2 コメの生産と消費

世帯主	作付面積 (m <sup>2</sup> )	収量 (kg)	自家消費量 (kg)	剰余量 (kg)	剰余量の割合 (%)	収入 (TZS)
KK	262,522	118,135	16,633	101,502	85.9	45,675,833
CM	42,573	19,158	14,129	5,029	26.2	2,262,915
US	100,274	45,123	5,723	39,400	87.3	17,730,045
SM	27,004	12,152	5,544	6,607	54.4	2,973,353
MK	106,072	47,732	4,471	43,261	90.6	19,467,518
NL	72,579	32,661	4,114	28,547	87.4	12,846,150
SP	30,503	13,726	3,219	10,507	76.5	4,728,173
SK	62,988	28,345	3,219	25,125	88.6	11,306,385
MM	24,023	10,810	2,862	7,949	73.5	3,576,938
YS	25,852	11,633	1,610	10,024	86.2	4,510,688
UM	6,736	3,031	1,073	1,958	64.6	881,145
中央値	42,573	19,158	4,114	10,507	85.9	4,728,173

TZS=タンザニア・シリング

まず、コメについて検討する（表 2）。2003 年に実施されたセンサスによると、ルクワ州で稲作をおこなう農家 1 世帯あたりの平均作付面積は、タンザニア全 26 州のなかで 3 番目に広い約 8,500 m<sup>2</sup>である（United Republic of Tanzania 2006a）。これに対して、スクマ 11 世帯のコメの作付面積の中央値は 42,573 m<sup>2</sup>である。これは、ルクワ州の平均値の約 5 倍の数値であり、かなり広い。さらに水田の単位面積あたりの収量も全国平均の約 3 倍である。以上から、中規模あるいは大規模な稲作農家が多いルクワ州のなかでも、この地域のスクマは概して広い水田を耕し、多くのコメを収穫する大規模な稲作農家であることがわかる。なかでも、KK の世帯の作付面積はルクワ州平均の約 31 倍の 262,522 m<sup>2</sup>であり、非常に大規模な稲作をおこなっている。

また、収量に占める剰余量の割合を見ると、26.2%から 90.6%までの幅があり、中央値は 85.9%であって、自家消費量を大きくうまわる量のコメを生産している。この剰余量をすべて販売したときの収入は、約 88 万 TZS から約 4,570 万 TZS までの幅があり、中央値が約 473 万 TZS である。この剰余の一部は翌年の種籾や緊急時のために貯蓄されて、すべてが売られるわけではないが、非常に大きな収益となっている。

つぎに、トウモロコシについて検討する（表 3）。2003 年に実施されたセンサスによると、ルクワ州でトウモロコシ生産をおこなう農家 1 世帯あたりの平均作付面積は、全 26 州のなかで 6 番目に広い約 10,000 m<sup>2</sup>である（United Republic of Tanzania 2006a）。これに対して、スクマ 11 世帯のトウモロコシの作付面積の中央値は 18,330 m<sup>2</sup>である。これは、ルクワ州の平均値の約 1.8 倍であり、コメほどではないものの、かなり広い。ルクワ州では、トウモロコシのばあいにも比較的、中規模あるいは大規模な農家が多いが、スクマはそのな

かでも大規模な生産をおこなっている。そのなかでもコメと同様に、トウモロコシ生産でも KK の世帯の作付面積は大きく、ルクワ州の平均値の約 14 倍であり、非常に大規模である。

表 3 トウモロコシの生産と消費

世帯主	作付面積 (m <sup>2</sup> )	収量 (kg)	自家消費量 (kg)	剰余量 (kg)	剰余量の割合 (%)	収入 (TZS)
KK	141,682	92,093	13,578	78,515	85.3	22,900,296
CM	26,411	17,167	11,534	5,633	32.8	1,643,002
US	8,179	5,316	4,672	644	12.1	187,935
SM	18,330	11,915	4,526	7,389	62.0	2,154,979
MK	42,341	27,522	3,650	23,872	86.7	6,962,565
NL	29,224	18,996	3,358	15,638	82.3	4,560,967
SP	5,040	3,276	2,628	648	19.8	189,000
SK	25,554	16,610	2,628	13,982	84.2	4,078,113
MM	6,390	4,154	2,336	1,818	43.8	530,104
YS	14,435	9,383	1,314	8,069	86.0	2,353,385
UM	1,623	1,055	876	179	17.0	52,194
中央値	18,330	11,915	3,358	7,389	62.0	2,154,979

TZS=タンザニア・シリング

また、収量に占める剰余量の割合を見ると、12.1%から 86.7%までの幅があり、中央値は 62.0%である。この剰余量をすべて販売したときの収入は、約 5 万 TZS から約 2,290 万 TZS までの幅があり、中央値が約 215 万 TZS である。スクマは半数以上の世帯で多くの剰余を生産しているものの、CM、US、SP、MM、UM など、それほど多くの剰余を生産していない世帯もある。

以上のようにスクマは、コメとトウモロコシを大規模に生産している。しかしながら、こうした生産をおこなうためには、世帯の構成員だけでは労働力が足りない。そこで多くのスクマは、住み込みの労働者だけではなく、近隣の農耕民ワンダや地域外から出稼ぎに来た人びとを日雇い労働者として雇用している。この 11 世帯のなかでは、住み込み労働者を雇用しない世帯でも UM 以外のすべての世帯が日雇い労働者を雇用している。なかでもとくに多くの剰余を生産している稲作において、田畑の除草や収穫、そして田植えのために多くの日雇い労働者が雇用されている。

つぎに、コメとトウモロコシについて、その商業化に見られる差異を検討する。図 5 は、表 2 と表 3 をもとにして、各世帯のコメとトウモロコシの剰余量を比較したものである。ウィルコクソンの符号付順位和検定によって両者の差を検定したところ、有意差が認められた。すなわちスクマの世帯は、トウモロコシよりもコメで自家消費量を大きく超えた剰余を生産しているのである。また、単位重量あたりの価格では、コメはトウモロコシの約 1.54 倍であるため、販売したときの収入を比較すると、コメはさらに大きくトウモロコシをうわまわることになる。

またスクマは、剰余分のコメについては、翌年の種籾を残してほとんどを市場で販売す

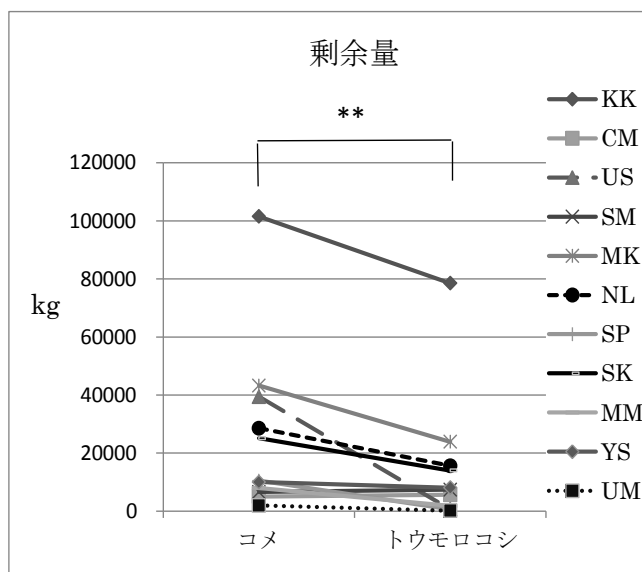


図5 コメとトウモロコシの剰余量の比較

\*\*有意差あり

るが、トウモロコシは市場で販売せず、日雇い労働の対価としてワンドに支払うことが多い。その理由のひとつは、コメの市場価格が高いことであるが、それ以外の理由もある。すなわちワンドは、家畜をあまり飼養していないために、牛耕によって大きなトウモロコシ畑を耕すこともできないし、厩肥を畑に施肥することもできない。そのためにワンドは、主食であるトウモロコシを多くは生産できないし、また、多くを生産したとしても、それを運搬する手段をもたない。したがって、とくに天候が不順の年には、主食のトウモロコシが不足することが多い。そのよ

うなときにワンドは、スクマのもとで日雇い労働をおこない、その対価として賃金ではなくトウモロコシを中心とする食糧を得るのである。なお、日雇い労働の対価としてワンドにコメが支払われることはない。その第一の理由は、ワンドのあいだで水田稲作が普及し始めたのは2000年以降であり、ワンドの食習慣にコメが定着していないことである。第二の理由は、コメを食べないワンドがコメを得たばあいには売却することになるだろうが、少量のコメを市場で販売することはむずかしいからである。

このようにスクマにとって、コメとトウモロコシの剰余の処分の方法は異なっている。価格の高いコメは市場で販売することで現金収入を得ており、商業的な要素が強い。他方で、価格が安くワンドのあいだで需要が高いトウモロコシは、積極的に日雇い労働の対価にあてられており、これは近隣地域内での食糧不足を補う機能もはたしていると考えられる。

### 3-3. 牧畜とその商業化

スクマが飼養しているおもな家畜は、ウシ・ヤギ・ヒツジであり、ホームステッドあるいは放牧キャンプで日帰り放牧をおこなって管理している。ヤギとヒツジは女性も男性も放牧することがあるのに対して、ウシを放牧するのはおもに男性の役目である。

これらの家畜のなかでもウシは、さまざまな用途に利用される。スクマの農耕にウシが不可欠なのは、3-2.で見たとおりである。搾乳される家畜はウシだけであり、牛乳は食用や儀礼用に利用されたり、ワンドの村やルクワ湖岸の漁撈キャンプで販売されたりする。ウシの肉は儀礼や重要な来客をもてなすときに食べられ、屠畜したあとの皮は敷物や紐として利用される。また、ウシは婚資などの社会的な交換財としても重要で、親族など人間関係を形成・維持するための媒体となっている。このように、ウシはスクマにとって最も重要な財であり、多くのウシを所有することは富の証でもある。とくに2,000頭以上



のウシを所有するものは、スクマ語で大富豪を意味する「サビンターレ」と呼ばれ尊敬の対象になる。

タンザニアの国勢調査 (United Republic of Tanzania 2006b) は、ウシを「在来種」「改良肉用種」「改良乳用種」の三つに分類している。在来種は、アフリカ各地で古くから飼養されてきたゼブー (コブウシ) であり、2003 年の統計資料では国内で飼養されているウシの 97.5% を占めている。スクマが飼養するウシも、すべてがこの在来種である。改良肉用種と改良乳用種はともにコブのないウシで、おもにヨーロッパで改良された品種である。

なお、ヤギとヒツジは搾乳せずに食肉として利用するほか、ヤギは社会的な交換財として副次的に利用することもある。また、荷駄用のロバや食用のニワトリ・アヒル、そしてイヌとネコも飼養している。

一般的にスクマはウシを成長段階のよって「成牛 (*ng'ombe*)<sup>6</sup>」「未成熟牛 (*moga*)」「子牛 (*ndama*)」に分類し、これにもとづいて牛群を分割して管理する。「子牛」とは、生まれてから離乳するまでのウシで、その目安となる月齢は生後 12~15 か月である。「未成熟牛」とは、離乳してから性的に成熟するまでの月齢 15~35 か月のウシである。オスウシの多くは、子牛か未成熟牛のときに去勢されて生殖能力を失うが、そのばあいにもおおよそこの月齢にしたがって分類される。表 4 は、スクマの各世帯の人数とこの分類にしたがったウシの所有頭数を示している。

世帯の人数や穀物の生産と同様に、ウシの頭数にも世帯によって大きな差があり、合計頭数の最大は CM 世帯の 4,561 頭、最小は UM 世帯の 0 頭である。ウシをまったく所有していない UM も、ヤギやヒツジを増やして将来的にはウシを所有したいと考えている。スクマにとってもっとも一般的な貧富の基準はウシの所有頭数であり、2,000 頭以上のウシを所有する KK と CM は「サビンターレ (大富豪)」である。中央値は NL 世帯の 233 頭であり、これはスクマのなかでは貧しくもなく裕福でもない、標準的な所有頭数だといわれる。2003 年の国勢調査 (United Republic of Tanzania 2006b) によると、タンザニアでウシの在来種を飼養している世帯の平均頭数は約 14.4 頭であるが、スクマのあいだで「ふつう」と表現される NL はこの約 16.2 倍のウシを所有している。すなわちスクマは、農耕だけでなく牧畜の面でも非常に大規模な生産をしていることがわかる。

---

<sup>6</sup> *ng'ombe* はウシ一般をさすこともある。

表4 各世帯の人数とウシの所有頭数

世帯主	人数	成牛			未成熟牛		子牛	合計
		未去勢	去勢	メス	オス	メス		
KK	93	28	92	951	222	473	727	2,493
CM	79	139	401	1,942	505	608	966	4,561
US	32	27	66	428	49	76	182	828
SM	31	8	20	234	41	74	138	515
MK	25	9	42	150	35	54	134	424
NL	23	6	28	91	20	31	57	233
SP	18	1	0	1	0	1	1	4
SK	18	2	8	11	2	4	14	41
MM	16	2	2	10	1	3	6	24
YS	9	1	6	23	3	15	20	68
UM	6	0	0	0	0	0	0	0
中央値	23	6	20	91	20	31	57	233

図6は、表4の各世帯について、人数とウシの所有頭数の関係を示したものである。スピアマンの順位相関係数の有意性を検定した結果、これらのあいだにはきわめて強い正の相関関係が認められた。すなわち、ウシの所有頭数が多い世帯ほど、世帯の構成員の数も多くなっている。多くのウシを管理するためには多くの男性牧夫が必要であり、そのためには世帯全体のサイズが大きくなる。スクマ社会では、ウシなどの家畜の所有権は世帯主である家長ひとりに集中しており、家畜の売買や交換を決めるのは基本的には家長である。したがって、富の象徴であるウシを多く所有しようとするものは、多くの妻をめとり世帯の規模を大きくしようとする。そしてまた、こうした世帯には3・1でみたように多くの住み込みの労働者がいる。

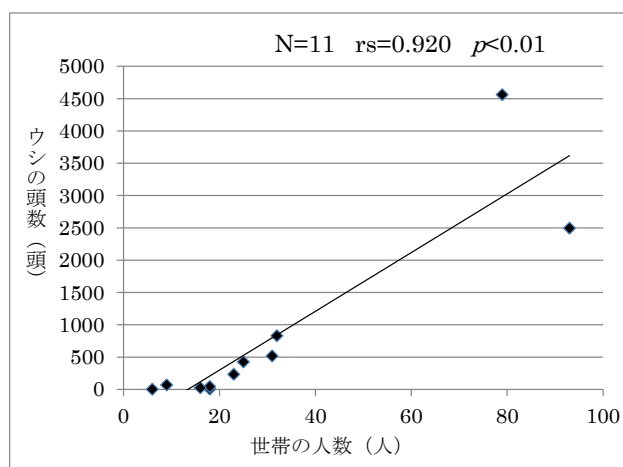


図6 ウシの所有頭数と世帯の人数

スクマは従来、日用品や緊急時の食糧購入といったように、生活の必要を満たすために少数の家畜を市場で販売するだけだったが、近年には家畜、とくにウシを積極的に市場で

販売するものが出現している。表 5 は、各世帯が市場で販売したウシの頭数を性別ごとに示している。ウィルコクソンの符号付順位和検定によってオスとメスの差を検定したところ、両者のあいだには有意な差が認められた。すなわち彼らは、メスよりもオスを積極的に市場で販売している。群れの増殖のためには必要がないオス個体を優先して販売することで、収入を得つつ、牛群の再生産力を維持しているのである。

表 5 販売されたウシの頭数

世帯主	オス	メス	計
KK	116	34	150
CM	16	6	22
US	6	7	13
SM	31	6	37
MK	23	5	28
NL	9	6	15
SP	0	0	0
SK	1	1	2
MM	1	0	1
YS	1	1	2
中央値	7.5	5.5	14

※ウシを所有していない UM 世帯は除く。

オスとメスの比較：有意差あり

( $p < 0.05$ 、ウィルコクソンの符号付順位和検定、 $N=10$ )

さらに、ウシを販売して得た収益をもとにして、農耕や牧畜以外の商業活動をおこなうスクマも現れた。それは調査対象とした 11 世帯のなかでは KK と SM、MK の 3 世帯であり、KK はホテルとバーの経営を、SM は大型トラックによる運送業とバーの経営を、MK は土地と店舗の賃貸経営をおこなっている。彼らはウシやコメを販売して得た収益によって、こうした商業活動のために必要な資本を入手している。これら 3 世帯のウシの平均販売頭数は 71.7 頭であり、そのほかの 10 世帯の平均 7.9 頭を大きくうまわっている。データ数に制限があるためにこの差を統計検定することはできないが、こうした商売をするスクマは多くのウシを販売しているのである。

以上のようにスクマのあいだでは、市場でウシを販売することが一般的になっているが、逆にウシを購入したスクマはいない。2-2. で見たように、大規模な移住を始める以前のスクマは、綿花生産によって得た収益でウシを購入しており、販売することはあまりなかった。その時期とくらべると、

スクマの市場を介した家畜の取引が大きく変わったことがわかる。

### 3-4. 農業以外の商業活動をおこなう世帯の家計

このようにスクマは、大きな世帯を組織して大規模な農耕や牧畜をおこない、多くの剰余を生産しており、積極的にウシやコメを市場で販売するようになった。そして、それによって得た収益をもとにして農業以外の商売をおこなうものも現れている。ここでは、そのような進取の気性に富むスクマである KK 世帯の家計を記述・分析する。調査対象としたのは、2011 年 1 月 8 日から 2011 年 7 月 9 日までの 183 日間である。

KK は、1980 年ごろというもっとも初期にこのルクワ平原に移住してきたスクマのひとりである。世帯の構成員は 93 人で、調査した 11 世帯のなかでもっとも大人数である。生産の規模もかなり大きく、農耕のためには多くの日雇い労働者を雇用し、もっとも多くのコメとトウモロコシを生産して、剰余を販売している。この地域でこのような商業的な稲作・畑作がおこなわれるようになったのは、1990 年代の中ごろ以降である。また、KK は 2 番目に多い 2,493 頭のウシを所有しており、この地域では代表的なサビンターレ(大富豪)である。しかし、KK がもっとも多くのウシを所有していたのは、現在よりも世帯の人数が

少なかった1990年代であったという。たとえば1995年に、ウシに課税するために政府がKKのウシの頭数を調べたときには4,000頭以上であったという。KKは、1999年からは多くのウシを販売し始めており、キリヤマトゥンドゥ村の中心部で2001年と2006年にふたつのホテルを建設し、経営している。

表6は、調査期間内のKK世帯の支出を項目別に示している。支払い方法はおもに現金で、その合計金額は約5,771万TZSである。また、トウモロコシやウシなどの現金以外で支払われたばあいは、「その他」に示している。

KKは、上記のふたつのホテルのほかに2009年から新しいホテルを建設し始めている。表6の「ホテルの建設」とはそれに関わる費用であり、具体的にはセメントや木材などの建材費と建築技術者・労働者に支払った工事費、そして都市部からキリヤマトゥンドゥ村までの建材の運搬費である。現金支出のうちの74.9%、4,300万TZS以上をこのホテルの建設費用が占めており、非常に大きな投資をしていることがわかる。なお、このホテルは2011年7月に完成した。

表6の「日雇い労働」は、農作業が大部分を占めている。除草や田植え、作物の収穫などの農作業以外では、家屋や家畜囲いなどの建築や補修に関わる労働がある。日雇い労働者は、おもに近隣に住む農耕民ワンダである。彼らのほとんどは小規模な農業をおこなっているため、現金収入が少なく、スクマのもとでの日雇い労働は貴重な現金稼得手段である。また、作物の収穫期である4月下旬から7月にかけては、100km以上離れた村や都市部からも現金収入を求める多くの人びとが、短期間の出稼ぎに来る。日雇い労働に対して支払われた現金は、約720万TZSであり、現金支出の12.5%を占める。ただし、その労働の対価は牛耕にもちいる去勢牛の貸出やトウモロコシで支払われることもある。トウモロコシは、食糧の不足する端境期である雨季に近隣のワンダの求めに応じて支払われることが多い。

表6 KK世帯の支出(2011年1月8日~7月9日)

項目	支払い	
	現金: TZS	その他
ホテルの建設	43,252,000 (74.9%)	
日雇い労働	7,200,400 (12.5%)	トウモロコシ 2,227kg、去勢牛の貸出 12 日間
生活・生産	3,475,800 (6.0%)	
ホテルの運営	2,288,000 (4.0%)	
住み込み労働	1,502,000 (2.6%)	メスウシ 1 頭、オスウシ 1 頭
合計	57,718,200 (100.0%)	

TZS=タンザニア・シリング

表6の「生活・生産」には、全体の6.0%を占める約348万TZSの現金が支払われた。これは、魚やタマネギなどの副食、衣料品、石鹸やカミソリなどの日用品、そしてラジオや携帯電話などの電化製品などを購入するための費用である。また、このなかには医療費も含まれており、具体的には村の薬局で購入した医薬品代やスクマの伝統医による施術費用などである。「生活・生産」には鍬や斧などの農機具の購入費も含まれる。

「ホテルの運営」には、全体の 4.0%を占める約 229 万 TZS が支出されている。これは、ロウソクやセッケンなどの消耗品の購入費、イスなどの設備費、ホテルの従業員などの人件費、そしてガソリンとディーゼルの燃料代である。これは発電機の燃料であり、ホテルで音楽 CD や DVD を鑑賞させるためのものである。

「住み込み労働者」に支払われたのは、全体の 2.6%を占める約 150 万 TZS である。彼らは表 1 に示した世帯の一員であり、ホームステッドで農作業や家事をおこなうものと、

**表 7 KK 世帯の収入**  
(2011 年 1 月 8 日～7 月 9 日)

項目	現金(TZS)	割合 (%)
ウシの販売	32,180,000	42.2
コメの販売	22,836,917	30.0
トウモロコシの販売	11,138,048	14.6
ホテルの収入	7,614,300	10.0
牛乳の販売	2,463,000	3.2
計	76,232,265	100.0

TZS=タンザニア・シリング

放牧キャンプで家畜の管理をおこなうものがある。前者にはおもに定期的に現金が支払われ、後者にはおもに 1 年間の労働に対して 1 頭のウシが支払われる。

表 7 は、KK 世帯の収入を示しており、約半年のあいだの合計金額は約 7,623 万 TZS である。現金以外で収入を得ることはなかった。コメとトウモロコシの販売によって得た収入は推定値であるが、ほかの収入は実数を

示している。

「ウシの販売」では、全体の 42.2%を占める 3,218 万 TZS の収入があった。この販売はすべて家畜商を介して現金で取引された。「コメの販売」と「トウモロコシの販売」では、それぞれ 30.0%と 14.6%を占める、約 2,284 万 TZS と約 1,114 万 TZS の収入があった。コメとトウモロコシは一年に一度収穫され、年間をとおして徐々に販売される。本調査の期間は約半年間であるため、ここでは表 2 と表 3 を参考に剰余量を販売した価格の 2 分の 1 を示している。なお、トウモロコシは 2,227kg が日雇い労働の対価として支払われたので、これを剰余から差し引いている。

「ホテルの収入」とは、宿泊料金とバーの飲み物の販売で得た利益（粗利益）であり、全体の 10.0%を占める約 761 万 TZS の収入があった。また、「牛乳の販売」で得た収入は全体の約 3.2%を占める約 246 万 TZS であった。KK 世帯では、KK の既婚の息子たち 5 人が放牧キャンプで大きな牛群の管理を任されており、牛乳の販売は彼らが自主的におこなっている商売である。この世帯では、家長 KK の許可なしに処分できる収入は、これだけである。

KK 世帯の収支の関係を現金でくらべると、収入が支出を約 1,851 万 TZS うわまわっており、全体としては大きな収益を上げていることがわかる。大きな現金の動きに注目すると、収入の大部分がウシとコメ、トウモロコシの販売によるもので、支出の大部分はホテルの建設費用である。KK は、従来の生業である牧畜と農耕を商業的に展開して得た収益を、今まではおこなっていなかった非農業の事業（ホテル経営）に投資しているのである。

そのホテル経営は、どの程度の利益をあげているのだろうか。宿泊や飲料の販売から得られた収入（表 7 の「ホテルの収入」）から、ホテル運営に関わる支出（表 6 「ホテルの運営」）を差し引くと、約 533 万 TZS の黒字（プラス）がある。しかしこの収益は、商業的

な牧畜や農耕による収入とくらべると、はるかに小さい。また、現在稼働しているふたつのホテルを建設するためには、おそらく1億TZSほどの多大な費用がかかっていると推定される。このように、金額の点で費用対効果を考慮すると、ホテル経営は農業よりも劣っているように思われるし、経営者であるKKもこのことを理解している。

コメとトウモロコシの販売による収入を合わせると、ウシの販売の収入よりも大きくなる。しかし、農耕には多くの労働力が必要であり、日雇い労働者や住み込み労働者への支払いは大部分がコメとトウモロコシの生産に関わるものである。この費用を収入から差し引くと、ウシの販売から得る利益がもっとも大きくなる。またKKは、大規模な農耕をおこなうことのデメリットとして、以下の2点も指摘している。第一に、世帯の構成員である親族に、女性もふくめて多くの負担がかかることである。第二に、労働者を雇用するさいには、賃金の交渉や支払いをめぐる諍いや被雇用者によるものと思われる盗難などの多くの問題が起こることである。

ここで、KKが所有する牛群の増減について検討してみたい。ウシの販売による収入がいくら大きくても、ウシの数が減少しているならば継続性がないからである。表8はKKのウシの増加頭数を示している。出生によって増えたウシは303頭で、婚資などの贈与によって得たウシは31頭である。一方、表9は減少したウシを示している。販売によって減少したのは150頭、死亡は26頭、贈与は27頭、屠畜されたのは6頭、労働への対価として支払われたのは2頭である。表8と9からKKの牛群の増減を算出すると、オスの増加が

表8 KK世帯のウシの増加頭数  
(2011年1月8日～7月9日)

性別	出生	贈与	計
オス	152	17	169
メス	151	14	165
計	303	31	334

表9 KK世帯のウシの減少頭数  
(2011年1月8日～7月9日)

性別	販売	死亡	贈与	屠畜	支払い	計
オス	116	16	14	6	1	153
メス	34	10	13	0	1	58
計	150	26	27	6	2	211

16頭、メスの増加が107頭であり、あきらかにオスよりもメスのほうが多い。これは、販売されたオスが116頭であるのに対して、メスは34頭に過ぎないためである。表5に示したように、KKはオスウシを優先して販売することで、牛群の再生産力を維持している。

KKがこのように多くのウシを販売し、経済活動を多様化しているにもかかわらず、ウシの頭数を減らさないように管理する理由は、KKがほかのスクマと同様に、ウシをもっとも重要な財産だと考えているからである。ウシの飼養は経済的にもっとも利益の大きい活動であるだけでなく、ウシは社会的にも文化的にも重要である。また、大規模な農耕はウシの畜力がないと成立しない。さらに農耕のばあいには世帯の成員だけでは大規模な生産ができないのに対して、牧畜(ウシ)ではそれができる。実際に、1990年代にKKの世帯は、現在よりも少ない人数によって、より多くのウシを管理していた。

しかし、同時にKKは、コメやトウモロコシの生産・販売とホテル経営も高く評価している。これについてKKは「これからはウシだけに頼ってはいけない。多様な財産を

もつ必要がある」語っている。

ここでは、KK がとくに収益の小さいホテル経営を高く評価している理由を述べよう。第一に、ホテルの従業員はすべて被雇用者であり、世帯の成員（親族）はその仕事を点検するだけでよいので負担が少ない。それに対して大規模な農耕は、世帯の人びとに多くの負担がかかるうえに、日雇い労働者を雇用するために賃金の交渉などで多くの問題が起こる。第二の理由は、ルクワ平原では人口が増加し続けており、放牧や農耕に必要な土地がいずれは枯渇するのではないかと、KK が懸念していることである。ホテル経営からは土地不足には関係なく安定した収入が得られる。第三の理由は、ホテルやバーは村の中心部にスクマの居場所を提供していることである。キリヤマトゥンドゥ村の中心部には市場や店舗が並んでいるが、ここは基本的にワンダの居住域であり、スクマはここを訪れても必要なものを購入するとすぐに去っていた。しかし、KK のホテルや SM のバーができたことによって、村の中心部にスクマたちが集うようになった。また、こうした場所はスクマだけでなくワンダや地域の外部から来た人びとも利用するため、民族の枠を超えた交流の場ともなっている。

#### 4. 経済活動の商業化を促した要因

本論ではこれまでに、ルクワ平原のスクマが農耕や牧畜、そして非農業活動を商業的に展開することで経済活動を多様化していることを示してきた。ここでは、このようにウシに強く依存する経済を脱却し、経済活動と財産の多様化をめざした実践がおこなわれるようになった要因を記述する。

##### 4-1. 大雨によるウシの大量死と稲作への評価

タンザニアでは 1997 年末から 1998 年初頭にかけて、エルニーニョによって引き起こされた大雨が各地に大きな被害をもたらした。ルクワ平原でも各地で大洪水が起こったという。この大雨は、以下の 2 点において、スクマが経済活動を多様化させていくきっかけとなった。

第一に、東アフリカ海岸熱と思われるウシの伝染病が大流行し、この地域のウシが大量に死亡したことである。東アフリカ海岸熱はタイレリア属の原生生物によって引き起こされるが、マダニ科コイタマダニ属のダニがこれを媒介する。大雨によってもたらされた高温多湿の環境が、このダニを大量発生させたものと思われる。この時期には、ほとんどのスクマが多くのウシを失っている。たとえば 1997 年当時、約 4,000 頭のウシを所有していたと思われる KK のウシは、この年に 500 頭以上が死んだという。2011 年 1 月から 7 月にかけての半年間に死亡した KK のウシが 26 頭（表 9）だったことを考慮すれば、当時の被害がいかに甚大だったのかがよくわかる。また、ほとんどの、あるいはすべてのウシを失ったものもある。たとえば SK は、1984 年に父から分与された 25 頭のウシを 10 年以上かけて 150 頭以上に増やしていたが、1997～8 年には、わずかに 9 頭を残してすべてのウシを失ってしまった。この時期の出来事について人びとは以下のように語っている。朝起きるたびに、家畜囲いのなかで数頭ずつのウシが死んでいった。そのようすを見て、比較的ウシの所有頭数が少ないスクマだけではなく、数千頭のウシを所有していたスクマも、富

の象徴であるウシが全滅するかもしれないという恐怖を感じたという。

第二に、大雨によって水田稲作への評価が高まった。洪水の被害で畑作物が壊滅的な被害を受けた一方で、多くの水田は例年並みの収量をあげることができた(神田 2011)。これによってスクマは、従来からおこなってきた水田稲作をさらに重視するようになったという。

このようにスクマは、1997～8年の大雨を直接的な契機として、従来の経済活動を再評価することになった。彼らが第一にとった対応は、もっとも重要な財産であるウシを病気の被害から守ることだった。たとえば彼らは、小型であるが東アフリカ海岸熱に対する耐性をもつといわれる「タリメ」という品種のウシを、タンザニアの北部から家畜商を介して導入している。また、ダニを駆除するための薬品を頻繁にもちいることによって、この病気の予防に努めている。

その一方で、多くのスクマがウシに強く依存する経済に対する不安を抱いており、とくに稲作を中心とする農耕を拡大し、流通が盛んになりつつあった市場を利用しながら商業的な農業を展開するようになったのである<sup>7</sup>。

#### 4-2. ウシの増加に対する社会的・政治的な圧力

タンザニアでは1961年の独立以降、牧畜民や農牧民が家畜の放牧地を求めて各地に移住しており、それにともなつて、農耕民とのあいだの対立が頻繁に起こつて社会問題化している。牧畜民の移住を引き起こした大きな要因は、2-2.で述べたように、植民地期から独立以降にかけて実施された農村開発政策や自然保護政策であり、マサイなどのほかの牧畜民もスクマと同様に移住している。

2-3.でふれたが、スクマと先住の農耕民とのあいだには、共住・共生の関係だけでなく対立関係もある。対立の直接的な原因は、農耕民の畑がスクマのウシによって食害を受けることである。とくに共生関係が強まる以前には、これによって多くの小さな争いが起こっていたし、ときには大規模な争いに発展することもあった。たとえばルクワ平原では、ムベヤ州ムサンガーノ郡に住む農耕民ニャムワンガが、移住してきたスクマを1999年に強力に排斥した。このときにニャムワンガはスクマの放牧キャンプを襲撃して多くの家畜を殺しており、2011年現在でもスクマはこの地域には住んでいない。また、タンザニア南東部にあるキロンベロ谷に住むスクマと農耕民は、現在は協調関係を築いているが、それ以前には農地と放牧地をめぐる対立していた時期があり、2006年には数十人の住民による乱闘事件も起こっている(加藤 2011)。

スクマだけに限らず、ほかの牧畜民と農耕民とのあいだでも、このような多くの対立が起こっている。たとえば2000年には、モロゴロ州キロサ県においてマサイと先住の農耕民とのあいだで30人以上の死者が出る大事件があった(古澤 2002)。この事件の原因も土地

<sup>7</sup> ウシの伝染病への対策として、稲作を重視せずに牛群をさらに拡大することで対処するCMのようなスクマもいるが、近年では彼のようなものは例外的である。CMは1997年当時、約1,500頭のウシを所有していたといわれており、当時約4,000頭いたKKの頭数よりもはるかに少なかった。しかし、現在ではKKはウシを減らして経済活動を多様化したのに対して、CMは約4,500頭までウシを増やしており(表4)、コメやトウモロコシはわずかな剰余を生産するのみである。



をめぐる対立であり、直接のきっかけは、農耕民の畑がマサイのウシによって食害を受けたことにある。

このような牧畜民と農耕民のあいだの争いに対して、政府が介入したこともあった。本論の調査地であるルクワ州では、ルクワ湖畔のムトウィサ村において、政府の介入によってスクマと農耕民が和解した事例がある。この地域では農耕民の土地とスクマの家畜の放牧地が複雑に入り組んでおり、それぞれが自分たちの正当性を主張していたため、多くのもめごとが発生していた。これに対してルクワ州政府は、州知事を議長とする特別委員会を設置して争いの原因を調査し、また、この争いを防止するための方策を議論する会議を開いて、具体策を示した『ムトウィサ宣言 (*Tamko la Mtowisa*)』(Ofisi ya Mkuu wa Mkoa Rukwa 1998) を 1998 年 9 月 17 日に発表した<sup>8</sup>。ここに示されたおもな具体策は、以下の 2 点である。第一に、自然環境を保護することの重要性を牧畜民 (スクマ) に教えるために啓蒙活動をおこなうこと、第二に、多くの家畜をもつ牧畜民 (スクマ) に対して、家畜の頭数を減らし、入手したお金を個人の能力向上や寄付、公共施設の建設などの社会的支援に使うように説得することである。

キリヤマトウンドゥ村に住む KK は、この地域でも多数のウシを所有する富豪として有名だったが、彼は『ムトウィサ宣言』に応じて、ほかのスクマに先駆けて多くのウシを売り、1999 年からキリヤマトウンドゥ村の中心部にホテルを建設し始めた。それ以降には、KK に続いてほかのスクマにも、ウシやコメを売って得た収入を資本として、非農業の商業活動を始めものが現れている。

ところで、牧畜民に対して家畜を減らすように要求する政府の主張には、牧畜民側の視点から検討するべき点がある。その第一は、牧畜民が過放牧をしているという主張である。「環境収容力」という概念がこの主張の根拠になっているが、東アフリカの牧畜民の生態系は多くの複雑な要素を内包しており、この概念を基礎とした単純な生態学的モデルが安易には適用できないことについては、すでに多くの研究の蓄積がある (太田 1998)。第二の点は、牧畜民が移住したり放牧地が不足したりする要因のひとつが、政策自体にあることである。具体的には、社会主義時代に実施された集住化政策は牧畜という生業にそぐわなかったこと (2-2.参照)、農業政策や自然保護政策のために政府が放牧地を取り上げたことである (古澤 2002)。

しかし政府は依然として、牧畜民に対して家畜を減らすように要求し続けている。その圧力はむしろ過激さを増しているようで、しばしば政府によって、スクマを中心とする牧畜民の排斥運動が暴力をともしながら実施されている (Porokwa 2009)。このように、農耕民や政府とのあいだにはさまざまな対立関係があり、スクマはウシを減らすように社会的な圧力をかけられている。そのためにスクマは、ウシに強く依存する経済活動を頼みにすることができなくなり、ほかの方途を模索するようになったのである。

---

<sup>8</sup> 『ムトウィサ宣言』はスクマの民族名を示しておらず、「シニャンガ州、タボラ州、ムワンザ州の出身の *wafugaji* (牧畜民、あるいは家畜飼養者)」と記している。これらの地域はスクマランドを含んでおり、この地域から家畜とともに移住してきた人びとのほとんどはスクマであることから、この政策が実際に対象にしている *wafugaji* はスクマであるといつてよい。

#### 4-3. 経済の自由化と市場流通網の普及

独立後のタンザニア政府は、1967年にアルーシャ宣言を採択して社会主義政策を実施したが、それが行き詰まってきた1986年には、世界銀行や国際通貨基金の勧告を受け入れて構造調整政策を採用するようになり、経済の自由化を進めていった。そして、1991年には価格統制を撤廃して穀物流通を独占していた国家製粉公社を解体した。これによって穀物流通は完全に自由化され、民間商人が流通市場に参入してきた。これ以降、キリヤマトゥンドゥ村にも民間の買い付け業者のトラックが往来するようになった。

おりしも1990年代はスクマの人びとが、ウシに強く依存する経済活動を再考することをせまられるようになった時期でもある。その要因は、以上で見てきたように、大雨によるウシの大量死と水田稲作に対する評価の高まり、そして牛群の縮小を求める政府や農耕民による圧力である。こうした状況のなかでスクマは、急速に普及しつつあった市場流通網を利用しながら、経済活動を多様化し始めたのである。

スクマはまず、それまでは自給的だった農耕のなかで、とくに稲作を拡大して商業的に展開していった。これは1990年代の後半以降に始まった比較的新しい傾向であり、それ以前は自家消費を大きくうわまわる剰余を生産することもなかったし、剰余分を市場で販売することもほとんどなかった。しかし、現在では多くの剰余を生産・販売して収入を得ることが一般化していることは、3-2.で見たとおりである。

稲作の商業化を促進している要因としては以下の2点が挙げられる。第一に、タンザニアでは穀物流通の自由化に伴ってコメの流通も活発になり、コメは国内市場をもつ貴重な商品作物として広く栽培されるようになった(加藤2011)。タンザニアの2003年のコメの生産量は1980年の約2.7倍に増加しているが、それにもかかわらずコメの輸入量も増加し続けている(FAO2004)。すなわち現在のタンザニアではコメの需要が非常に大きいため、収穫の時期になると多くの商人がキリヤマトゥンドゥ村まで買い付けにくる。

第二に、大規模な農業をおこなうためには多くの労働力が必要であるが、スクマが親族以外の多くの労働者を雇用できる条件が整ったことが指摘できる。経済が自由化し医療や教育などの公共サービスを利用者が負担するようになったために、農村部でも急速に現金の必要性が増加した。そのため、農業生産が小規模で現金稼得手段をあまりもたないワンダの多くが、スクマに雇用されることで現金収入を得るようになり、また、他地域からも多くの出稼ぎ労働者が訪れるようになった。雇用機会を求める彼らと、労働力を雇用して商業化を推進したいスクマの生計戦略が合致したのである。

近年には牛肉もまた、コメと同じように主として都市部での需要が増しており、その価格も上昇を続けている。3-3.で見たように、彼らは多くのウシを売っている。そして、その一部の人びとはウシやコメを売って得た収益を資金にして、非農業の商業活動をおこなっている。これらの商業活動は経済の自由化によって成立したのだが、逆にまた、自由な流通を促進している部分もある。たとえば、観光客などが訪れることのないこの地域では、KKのホテルの宿泊客はほとんどが商人であり、このホテルは商業のインフラストラクチャーとなっていると考えられる。

スクマは、このように市場を利用して財産を多様化し、ウシに強く依存する経済から脱却しようとしている。そしてこの傾向を強めていくことは、牛群の拡大とは両立しがたい側面をもつ。なぜなら、彼らは商業化のために多くの人びとを雇用しているが、労働者を

管理するためにはかなりの時間と労力が必要になる。世帯全体の仕事を総合的に把握し、計画を立てて労働力を管理するのは既婚男性の役割であるが、彼らは同時に家畜の管理を担い、みずから放牧に出かけることもある。したがって経済活動の多様化と牛群の拡大とは両立しにくい。

## 5. おわりに

### 5-1. 経済活動の商業化と従来の生業の維持

牛群の拡大に大きな価値をおき、自給的な農業をおこなってきたスクマは、植民地期に商品作物としての綿花栽培を開始して積極的に市場で販売してきた。しかし、綿花の販売で得た収入を使って、多くの人びとが購入したものは、やはりウシだった。市場経済・現金経済に巻き込まれようとも、蓄積すべき財産の最終目標は、やはりウシだったのである。そして、スクマランドの放牧地が枯渇してもなお、多くのウシを所有したいと願う人びとは、1970年ごろから放牧地を求めてタンザニア各地へと移住し始めた。本論で対象としたのは、このようにとくにウシの価値を重視してきた人びとである。

この人びとのあいだで、市場経済と従来の生業経済が複合的に併存していたようすは、湖中(2006)がケニアの牧畜民サンプルの事例について指摘した二重経済に通底するところがある。スクマと同様に、家畜をもっとも重要な財産と考えているサンプルは、市場を介してオスウシを売却しメスウシを購入するという方法で、従来の生業経済を維持・再生産しようとしている。

しかし近年、ルクワ平原に移住したスクマは市場を活用して商業的な農業を展開し、経済活動を多様化し始めた。それは、3.に示した具体的な事実に現れている。スクマでは、多くの世帯が住み込み労働者を、そしてほとんどすべての世帯が近隣に住むワンダを日雇い労働者として雇っており、このような労働者がスクマの大規模な生産を支えている。また3.で示した生産の項目の中央値は、一般的なタンザニア農民の生産規模を大きくうわまわっている。すなわちこのような大規模生産をおこなうことは、この地域のスクマにとって一般的な傾向である。

スクマの経済活動の新しい展開のなかで注目すべきことのひとつは、かつては蓄財の対象であったウシを現在では購入せずに、むしろ積極的に販売していることである。そして彼らは、ウシを管理する労働力を減らしてでも、経済活動と財産を多様化している。一部のものは、ウシやコメや売った利益を投資して、非農業の商売を始めるようになった。これはかつてとは異なり、いまでは彼らにとっての財産の最終目標がウシだけではなくなったことを意味している。

経済活動をこのように商業的に展開することには、多くのデメリットがともなっている。第一に、コメとトウモロコシの生産において市場を介して大きな収入を得られるようになった反面、牧畜とくらべると世帯の構成員である親族の負担が大きくなっただけでなく、雇用労働力に対する支出が大きくなり、また、労働者を雇用するさいのもめごとが多くなるなどの問題がおこっている。それにもかかわらず、ほとんどのスクマが多くの労働者を雇用して自給量を大きくうまわる剰余穀物を生産し、商業的に展開している。第二のデメリットは、ホテル経営などの農業以外の商業活動は、農耕や牧畜と比較すると収入が小

さいうえに、始めるさいには多くの資本が必要になることである。しかし彼らは、これを高く評価している。

このように、彼らが経済活動を大きく転換してきた要因は、4.で見たように、1990年代後半から市場流通網が整備されてきたことに加えて、ウシに強く依存する従来の経済活動に対して、スクマが大きな不安を抱くようになったことである。さらに、耕作地が不足することへの懸念が、小さな土地でも収入を得られるホテル経営や運送業などのサービス業に向かわせていると考えられる。

しかしスクマは、経済活動を商業化させる一方で、家族の生存を指向する従来の経済活動を維持している側面がある。それは農耕においては、穀物の生産を拡大して自家消費量を確保し、剰余分だけを販売していること、そして牧畜においては、繁殖に必要なないオスウシを優先して販売することで牛群の再生産力を維持していることに表れている。実際に、この地域でもっとも多くウシを販売しているKKの牛群の増減を検討したところ、ウシの頭数は増えていた。ほかのスクマはKKほど多くのウシを売っていないため、スクマは全体的にウシを増やしていると推測できる。このことは、スクマにとってウシだけが財産の最終目標ではなくなったものの、いまだにウシがもっとも重要な財産であり続けていることを示している。それは2-1.に述べたように、スクマにとってウシが経済的にも社会的にも重要な価値をもつことに加えて、3.でふれたように、近年に見られる大規模な農耕や農業以外の商業をおこなううえでも、ウシが不可欠だからである。

## 5-2. 小農から豪農へ

以上のようなスクマの経済活動のありかたには、先行研究が指摘してきたアフリカ農民の経済活動の特徴と共通する部分があった。それは第一に、家族労働を基本とし、自給的な生産を重視していることであり、第二に、近年の市場経済の浸透のなかで農業を商業化し、また、農業以外の商業にも従事していることである。

しかしスクマの経済活動には、従来のアフリカ農民像には見られなかった重要な特質がある。第一に彼らは、ウシを中心とする家畜を利用して、それまでは不毛の地であった湿地などの生態環境に進出・適応してきた。その当初の目的は、伝統的に価値をおいてきた牛群を拡大することであり、そのことは彼らを、いったんは国家や市場の介入から遠ざけることとなった。しかしその後には彼らは、牛群の拡大が危機に直面している状況のなかで、農と牧が有機的かつ大規模に複合する経済体制を構築し、自然環境を効果的に利用して市場にアクセスするようになったのである。

第二の新しい特徴は、スクマの世帯の成員はほかの世帯に雇われることがなく、むしろ近隣の農耕社会や地域外から多くの労働者を雇用して剰余生産を拡大していることである。ここには、投資によって資本を拡大しようとする資本家的な態度を読みとることができるし、それは、アフリカで広く見られるような賃労働におもむく小農の生計戦略とは対照的である。

第三には、スクマの大規模な経済活動の母体は、親族を中心とする大規模な世帯によって構成されている。そしてそうした世帯は、構成員のなかの親族の人数が多くなるほど、外部から多くの労働者を雇っており、経済活動の母体も大きくなる。こうして大規模な商業活動に従事する世帯が出現したのだが、そうした世帯であっても家長個人が財産に対し

て大きな権限をもっているため、非農業の商業活動に対して比較的自由に大きな投資をおこなえる。そのため、本論で取り上げたホテル業やトラック輸送業のような大規模な事業を開業・経営できるのである。

こうした特徴をもつスクマの経済活動は、かつては小農的であったが、現在では「豪農的」に展開している。また、彼らの活動は周辺住民との相互関係のうえになりたっている。本論ではこの点について、雇用－被雇用という側面に限定してスクマの側から記述してきたが、「豪農的」なスクマの存在は、地域社会全体に対して社会的・文化的にも大きな影響をあたえている。こうした問題については、別稿で論ずることにしたい。

## 謝辞

本論の執筆にあたっては、「京都大学グローバル COE プログラム：2010 年度フィールドステーション等派遣経費支援」からの研究助成を受けた。記して謝意を表する。

## 参考文献

Birley, M. H.

1982 “Resource Management in Sukumaland, Tanzania,” *Africa* 52-2: 1-29.

Bryceson, D. F.

1996 “Deagrarianization and Rural Employment in sub-Saharan Africa: A Sectoral Perspective,” *World Development* 24-1: 97-111.

Charnley, S.

1997 “Environmentally-Displace People and the Cascade Effect: Lessons from Tanzania,” *Human Ecology* 25-4: 593-614.

Cliffe, L.

1987 “The Debate of African Peasantries,” *Development and Change* 18: 625-635.

Dahl, G.

1981 “Production in Pastoral Societies,” In Galaty, J. G., D. Aronson, P. C. Salzman, & A. Chouinard (eds.), *The Future of Pastoral Peoples*, pp. 200-209, Ottawa: International Development Research Centre.

FAO

2004 *Production year book vol. 57*, Rome: FAO.

福井 勝義

1969 「半農半牧民の生態学的考察：イラク族の移住と定着をめぐる」『アフリカ研究』9号：1-18。

古澤 紘造

2002 「岐路に立つ牧畜民と窮状打開への模索：タンザニアの事例」、草野孝久（編）『村落開発と国際協力：住民の目線で考える』、pp. 89-103、古今書院。

Galaty, J. G.

1988 “Pastoral and Agro-pastoral Migration in Tanzania: Factors of Economy, Ecology and Demography in Cultural Perspective,” In Bennett, John W. & John

- R. Bowen (eds.), *Production and Autonomy: Anthropological Studies and Critiques of Development*, pp. 163-183, New York: University Press of America.
- Hankins, T. D.  
1974 "Response to Drought in Sukumaland, Tanzania," In White, G. F. (ed.), *Natural Hazards: Local, National, Global*, pp. 98-104, London: Oxford University Press.
- Havnevik, K.  
2010 "A Historical Framework for Analysing Current Tanzanian Transitions: The Post-Independence Model, Nyerere's Ideas and Some Interpretations," In Havnevik, K. & A. C. Isinika (eds.), *Tanzania in Transition: From Nyerere to Mkapa*, pp. 19-55, Dar es Salaam: Mkuki na Nyota Publishers.
- Hyden, G.  
1980 *Beyond Ujamaa in Tanzania: Underdevelopment and Uncaptured Peasantry*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press.  
1983 *No Shortcuts to Progress: African Development Management in Perspective*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- 掛谷 誠  
1974 「トングウェ族の生計維持機構：生活環境・生業・食生活」『季刊人類学』5巻3号：3-90。
- 神田 靖範  
2011 「半乾燥地における水田稲作の浸透プロセスと民族の共生：ウソチェ村におけるワンダとスクマ」、掛谷誠・伊谷樹一（編）『アフリカ地域研究と農村開発』、pp. 371-410、京都大学学術出版会。
- 加藤 太  
2011 「氾濫原の土地利用をめぐる民族の対立と協調：キロンベロ谷の事例」、掛谷誠・伊谷樹一（編）『アフリカ地域研究と農村開発』、pp. 91-119、京都大学学術出版会。
- 湖中 真哉  
2006 『牧畜二重経済の人類学：ケニア・サンプルの民族誌的研究』、世界思想社。
- Malcolm, D. W.  
1953 *Sukumaland: an African People and Their Country*, London: Oxford University Press.
- Meerterns, H. C. C., Ndege, L. J. & Enserink, H. J.  
1995 *Dynamics in Farming Systems: Changes in Time and Space in Sukumaland, Tanzania*, Amsterdam: Royal Tropical Institute.
- Meerterns, H. C. C., Fresco, L. O. & Stoop, W. A.  
1996 "Farming Systems Dynamics: Impact of Increasing Population Density and the Availability of Land Resources on Changes in Agricultural Systems. The Case of Sukumaland, Tanzania," *Agriculture, Ecosystems and Environment* 56-3: 203-215.
- Ofisi ya Mkuu wa Mkoa Rukwa

1998 *Tamko la Mtowisa*, Sumbawanga: Ofisi ya Mkuu wa Mkoa Rukwa.

太田 至

1989 「アフリカの牧畜：家畜の所有と移籍をめぐる諸問題を中心に」、海外学術調査に関する総合調査研究班（編）『東南アジアとアフリカ：地域間研究へ向けて』、pp. 123-140。

1998 「アフリカ牧畜民社会における開発援助と社会変容」、高村泰雄・重田眞義（編）『アフリカ農業の諸問題』、pp.287-318、京都大学学術出版会。

Porokwa, E.

2009 “Pushing, Hounding and Bullying: Half a Decade of Resentment and Acrimony towards Indigenous Peoples in Tanzania,” *Indigenous Affairs* 3-4: 22-29.

Saylor, R. C.

1970 *A Social Cost/ Benefit Analysis of the Agricultural Extension and Research Services in Selected Cotton Growing Areas of Western Tanzania*, Dar es Salaam: The University.

Schneider, H. K.

1968 “Economics in East Africa Aboriginal Societies,” In LeClair, E. E., Jr. & H. K. Schneider (eds.), *Economic Anthropology*, pp. 426-445, New York: Holt Rinehart and Winston.

島田 周平

2007 『アフリカ 可能性を生きる農民：環境・国家・村の比較生態研究』、京都大学学術出版会。

Tanzania, MA & FS, SU (Ministry of Agriculture and Food Security, Statistics Unit)

2002 *Basic Data Agriculture Sector 1994/1995-2000/01*, Dar es Salaam: Tanzania, MA & FS, SU

富川 盛道

2005 『ダトーガ民族誌：東アフリカ牧畜社会の地域人類学的研究』、弘文堂。

United Republic of Tanzania

2006a *National Sample Census of Agriculture 2002/2003 Small Holder Agriculture Volume 2: Crop Sector-National Report*, Dar es Salaam: United Republic of Tanzania.

2006b *National Sample Census of Agriculture 2002/2003 Small Holder Agriculture Volume 3: Livestock Sector-National Report*, Dar es Salaam: United Republic of Tanzania.

吉田 昌夫

1997 『東アフリカ社会経済論：タンザニアを中心として』、古今書院。

## Diversification of Economic Activities in an East African Agro-pastoral Society: A Case Study of Migration and New Livelihood of the Sukuma in Tanzania

Naoaki Izumi

The Sukuma live mainly in Northwestern Tanzania and are engaged in both farming and livestock-rearing. Some of them have started to migrate southwards in search of grazing land in the 1970s, because the population of both humans and cattle has increased. This paper examines the characteristics of economic activity of the Sukuma, who have moved to the Rukwa plains, in Southwestern Tanzania. On the one hand, their economic activity has features similar to that of East African peasant economy, in the sense that it aims at a stable self-sustaining community that depends mainly on the fruits of family labor, and that people start to commercialize their farm's produce and venture into non-agricultural businesses. However, their economic activity has the following three unique characteristics. First, they migrated into untilled swamp areas, and engaged in large-scale rice/maize farming using livestock. Second, they employed a lot of laborers from neighboring communities in order to expand their commercial activities. Third, the core of these commercial activities was carried out by household members and their kinsmen.

In their homeland, the Sukuma started to grow cotton as a cash crop during the colonial period and they bought cattle with the profit of cotton production to expand their pastoral livelihood. However, in the Rukwa plains today, they shifted to rearing and selling cattle instead. They are also engaged in commercial farming and non-agricultural businesses, which are not profitable as cattle rearing. They started these new economic activities because of the following reasons. Firstly, they feel insecurity of their traditional livelihood that largely depends on cattle. What caused this sense of insecurity are: (1) prevalence of a cattle disease, (2) the land dispute between the Sukuma and their neighboring communities, and (3) political pressures from the government that demands curtailment of cattle production. Secondly, due to economic liberalization and establishment of distribution channels, a good market for cattle and cereals has started. The Sukuma try to diversify their economic activities by using these new market opportunities. And so, while they still consider their livestock to be their most important property, they have also started to venture into a capitalist mode of large-scale farming production.

### **Keywords**

Livelihood of Farmers, Cattle Rearing, Large-Scale Family, Commercialization of Agriculture, Non-agricultural Business